

か す め け ん と う じ ん じ ゃ

本多作左衛門生誕の地  
犬頭伝説

# 糟目犬頭神社



神社名	糟目犬頭神社
御祭神	彦火火出見尊 犬頭霊神 豊受姫命（御鋤社） 伊弉諾尊,伊弉冉尊,素戔嗚尊(三社熊野神)
創建	犬頭神社：470年ごろ 糟目神社：701年 糟目神社を犬頭神社へ合祀：1190年
文化財	石鳥居、石造狛犬、石造唐猫
住所	岡崎市宮地町字馬場31番地

これまでの「地域の歴史を探る会」は全てお寺でしたが、今回初めて神社での勉強会となります。

コロナ感染者が急増する中ではありましたが24名が参加し、手指消毒を行い、冷える朝ではありましたが拝殿の扉は開放し、座る胡床の間隔を取り、感染防止を徹底しての開催となりました。



宮司の赤堀さんからお話を伺いましたが、御神前まで上がって唐猫、狛犬も見せていただけるといふことで、正式参拝の儀（修祓、献饌、祝詞奏上、玉串奉天、撤饌）から始まりました。また、正しい参拝、玉串奉天の方法も教えていただきました。

### ●文化財の石造狛犬・唐猫

そのあと本殿前で岡崎市文化財に指定されている唐猫と狛犬を見せていただきました。

唐猫は普段本殿内に納められていますが、特別に出して見せていただきました。

何れも緑色をおびた越前産の笏谷石(凝灰岩)できており、



本殿前の狛犬と唐猫



吽形の狛犬（雄）



阿形の狛犬（雌）



雄の狛犬の股間



雄の狛犬の背の銘文

狛犬は左の吽形うんぎょうが雄(股間に性器が彫られている)、右の阿形あぎょうが雌です。珍しいストレートヘアのたてがみをしており、吽形の背中には慶長15年岡

崎藩主本多豊後守康令が奉納したことが彫られています。

唐猫も阿形・吽形の対ですが、雌雄の区別はないそうです。狛犬とは作風が違っており、背中には慶長10年に鳥居を作った市川猪兵衛正重がそのお礼に寄進したと彫られています。



唐猫（阿形⑤と吽形⑥）

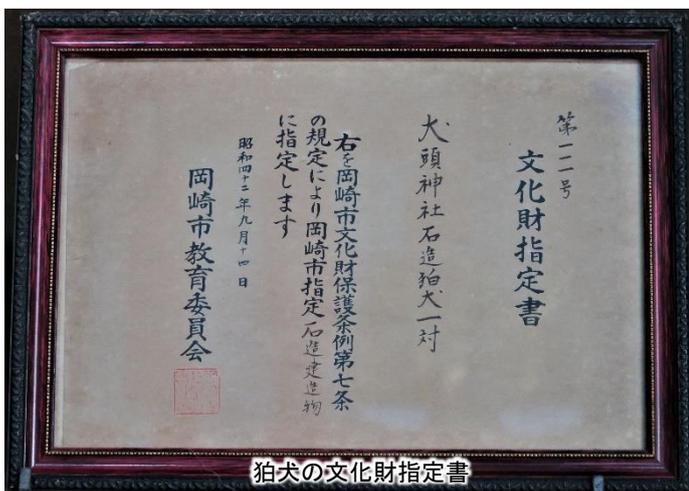


唐猫の背の銘文

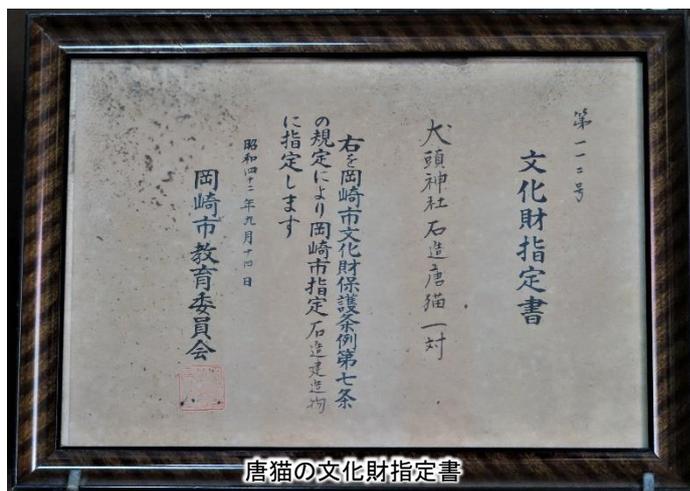
笏谷石は北前船で運ばれたために

特に日本海側で多いですが、愛知県は少なく鳥居で笏谷石を使っているのはここだけだそうです。

岡崎は御影石に産地ですが、産出されるようになったのはこの後のようで、また徳川家は先祖を祀る銅瓦や緑釉陶器を用いる場合があります、ここで笏谷石が使われたのは緑色の石材であったからかもしれないということです。



狛犬の文化財指定書



唐猫の文化財指定書

<詳細は「[岡崎市指定文化財](#)」「[笏谷石は西へ東へ \(中日新聞 Web 日刊県民福井\)](#)」「[彫刻の紹介](#)」「[犬頭神社石造狛犬 \(東海愛知新聞記事\)](#)」参照

## ●御由緒

犬頭神社は西暦470年頃に養蚕の守護神を祀ったのが始まりで、養蚕の守護神が犬頭霊神と思われる。永延元年(987)年に熊野権現を合祀し熊野権現と称した。

糟目神社は大宝元(701)年に彦火火出見尊を祀り、延喜式には三河国二十六座、碧海六座の一社として崇敬された。元々は上和田の森崎にあったが洪水により健久元(1190)年犬頭神社に合祀された。

延喜式神名帳に、三河国碧海郡六座の式内社として糟目神社が記されているが、豊田市渡刈町にも糟目神社があり、明治初期にどちらがこの式内社かの論争があった。神祇官の裁定により豊田側が式内社とされたが、名は糟目春日神社となり、当社は明治4(1871)年、額田懸令により糟目犬頭神社となった。

戦前神社の敷地は国有地だったが、戦後払い下げ時の申請書の添付資料「式内 糟目犬頭神社御由緒」には馬場あったと記されているが現在の参道で流鏝馬などが行われたと思われる。また、大正天皇即位悠紀齋田の際の稲實殿が下賜され、宝庫として使用していたと記されており、現存しないがこのころまではあったと思われる。



明治5年頃の糟目犬頭神社の図

<詳細は「[糟目犬頭神社 由緒書略記](#)」「[糟目犬頭神社年表](#)」「[糟目犬頭神社の御祭神と御由緒](#)」「[式内 糟目犬頭神社御由緒](#)」参照

●御祭神 <詳細は「[糟目犬頭神社の御祭神と御由緒](#)」参照>

- ・「彦火火出見尊」、天照大神のひ孫で神武天皇の祖父にあたり、神話「海幸彦・山幸彦」の山幸彦で、(養蚕の大神)、子孫繁栄の神。 <詳細は「[系譜 天照大神～神武天皇](#)」参照>
- ・「伊弉諾尊」「伊弉冉尊」「素戔嗚尊」熊野三山に祭られる神。 <詳細は「[熊野大社について](#)」参照>
- ・「犬頭霊神」は犬頭伝説の白犬の霊を祀ったものだが養蚕の守護神と思われる。 <詳細は「[糟目犬頭神社の御祭神と御由緒—御神徳](#)」参照>
- ・六ツ美村誌には「豊受姫令」を祀る境内社として御鋏社があったとあるが、御鋏社は現存せず、合祀されていると思われる。

以上、宮司のお話の後、社務所の「犬頭伝説の掛軸」、境内の「石鳥居」「首塚」「本多作左衛門重次生誕之地碑」などを見学し、自由解散となりました。

●犬頭伝説の掛軸

社務所の床の間に、宇都宮泰藤が切った犬の首が大蛇の喉に噛みついた犬頭伝説の場面を描いた掛軸が掛けられています。

<犬頭伝説の詳細は「[糟目犬頭神社 由緒略記](#)」[犬頭物語](#)」参照>

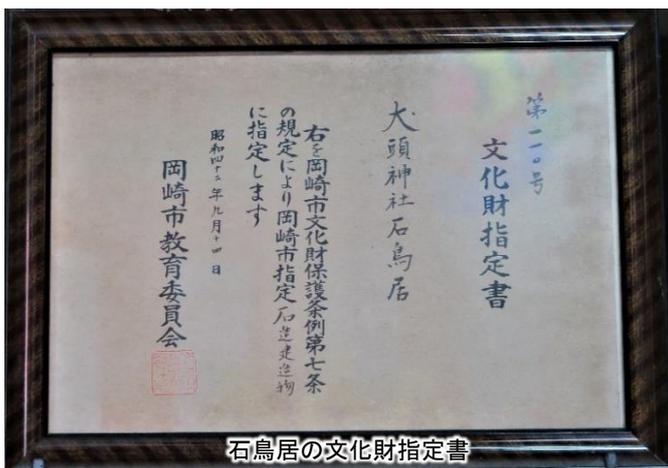


犬頭伝説の掛軸図

左写真□部の拡大図

●石鳥居

慶長10(1605)年岡崎城主本多康重が奉納したもので、岡崎市文化財に指定されている。狛犬と同様に越前産の笏谷石が使われている。



石鳥居の文化財指定書



石鳥居



石鳥居の柱の銘文

柱の銘文には、慶長10年6月吉日に岡崎城主本多康重が犬頭大権現へ奉納したことが刻まれている。

笠木・島木部分は破損したため新造されているが、元のものは神門に入った右側に置かれている。



元の笠木・島木部分

<詳細は「[岡崎市指定文化財](#)」[「犬頭神社の石鳥居（東海愛知新聞記事）」](#)参照>

## ●首塚

境内の東側にある池の小島に、小さな祠があります。宇都宮泰藤が京で獄門に晒されていた新田義貞の首を奪い埋めたもので、これを隠すため犬頭伝説を広め、犬の首を祀ったことにしたと云われています。

<詳細は「[糟目犬頭神社 由緒略記](#) [首塚](#)」参照>



## ●本多作左衛門重次生誕地之碑

「一筆啓上・作左の会」に一番ゆかりのある碑です。

明治38年4月に建立され、表面には元岡崎藩主本多忠敬の揮毫で「三河三奉行 本多作左衛門重次生誕地之碑」と彫られ、裏面には発起人56名の氏名と「宗家 當代 本多房吉」の名が彫られています。

<詳細は HP「[一筆啓上 本多父子小辞典](#)」を参照>

<以上>

<当日の配布資料>

- ・[地域の歴史を探る会 勉強会資料](#)
- ・[補足資料](#)

<参考>

左は昭和23(1948)年12月8日にアメリカ軍が撮影した航空写真です。参道(馬場)が現在よりも倍以上も長かったことがわかります。右は現代の写真です。



本資料の URL



昭和23年12月の犬頭神社付近の航空写真



現代の犬頭神社付近の航空写真(Google Earthより)